

平成22年 5月31日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19320131
 研究課題名（和文） 東アジア世界の近代都市図集成とその比較地図史的研究
 研究課題名（英文） The construction of databases on the modern urban maps in East Asia and their comparative research
 研究代表者
 長谷川 孝治（HASEGAWA KOJI）
 神戸大学・人文学研究科・教授
 研究者番号：60124872

研究成果の概要（和文）：東アジア世界の19世紀後半から20世紀前半のさまざまな都市図をデータベース化し、それらを通時的かつ共時的に分析することにより、各地域における都市景観の同質性と差異を追究することを目的として研究を推進した。その成果として東アジア世界の近代都市図を比較・考察し、国際学会や国際シンポジウム、全国学会等で論議できたことは意義深い。さらに中国（北京、上海など）や朝鮮半島（ソウル）、ロシアなどにおいて、多数の新出地図を発見できたことは本研究にとって極めて重要であった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to construct the databases on the modern urban maps in East Asia from mid 19th to mid 20th century, and to analyze them diachronically and synchronically and then discuss the homogeneity and difference of map culture and urban landscape. The results are widely presented at many international conferences on the history of cartography and at some domestic meetings of historical geography and symposia on the urban mapping in East Asia. In this project we find many new maps in China, Korea and Far Eastern Russia.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2007年度 | 6,900,000 | 2,070,000 | 8,970,000 |
| 2008年度 | 3,000,000 | 900,000 | 3,900,000 |
| 2009年度 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 13,100,000 | 3,930,000 | 17,030,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：近代都市図、東アジア世界、都市図データベース、比較地図史、中国近代都市図、朝鮮半島近代都市図、ロシア極東近代都市図、日本近代都市図、

1. 研究開始当初の背景

（1）基盤的背景：東アジア世界の20世紀前半までの近代都市図をデータベース化する試みは、ほとんど着手されていない。日本の都

市図についてはもとより、周辺諸国・地域の都市図については、依然、全体像を把握できない状況である。こうした研究段階で、前近代を含めた都市図のデータベース化とその公

開は、地図史研究の進展にとって大きな意義を有するといえた。また都市図をその関連する史資料との関連において総合的に解明する手法も、従来、等閑視されてきた側面を補完する意味で、学術的意義は高いといえた。

(2) 独創的背景：東アジア世界の都市図全体を伝統的および近代的景観要素から政治的・社会的コンテキストで分析する視点は、従来に見られない極めて独創性の高い研究であり、また東アジア都市図相互の比較検討も大きな意義を有するものであった。

(3) 先端的背景：ルネサンス期以後のヨーロッパでは、正面図、鳥瞰図、平面図などさまざまな角度から都市が表現されてきた。日本でも多様な視点から都市が表現されてきたが、東アジア世界全体では都市図の全貌そのものが明らかになっていない。ヨーロッパ型都市図と東アジア型都市図との間には、差異と共に普遍性も認められ、それらの個々の景観要素のうちにも伝統的なものと、近代ヨーロッパ近代なるものが並存して独自の都市景観を形成、変容していったことが予想された。このプロセスを、東アジア世界全体を視野に納めて再吟味することは国際的に重要な意義を有するといえた。

2. 研究の目的

19世紀後半以降、日本・中国・朝鮮半島を中心とする東アジア世界は急速な近代化の波の中で都市の近代化と膨張を経験した。その過程で伝統的な都市景観の改変・破壊と平行して、近代的な都市景観が形成され、また変容を遂げていった。本研究では、東アジア世界の19世紀後半から20世紀前半のさまざまな都市図をデータベース化し、それらを通時的かつ共時的に分析することにより、各地域における都市景観の同質性と差異性を追究することを最大の目標とした。

(1) 上記の目標を達成するためには、まず前近代都市図を初め、吉田初三郎鳥瞰図及び外邦図、地形図、航空写真、衛星画像をはじめとする各地域の多様な都市図やその関連資料を比較検討する必要がある。これを実現するためには大量の都市図データをデジタルベース化することが必須であり、こうした都市図の統合的集積を基盤的目標とした。

(2) 東アジア世界における前近代の伝統的都市景観の特質および近代的都市景観の形成過程を解明し、各地域の独自性と同時に、対象地域全体に共通する同質性を解明する。

(3) 東アジア世界の都市が近代的に変容する過程で都市の中に刻印されていった、欧米的都市景観要素を抽出し、その受容の地域による差異と類似性を政治的・社会的コンテキストで解読することを最終的目標とする。

3. 研究の方法

(1) 従来の研究成果の共有化を図るため、まず刊行されているいくつかの都市図目録の中から、ベースマップとなる大縮尺都市図を選定し、また同時に膨大な複製地形図集の中からも都市図を選び出し、同一の作業を行った。

(2) つぎに吉田初三郎の鳥瞰図から、都市図として解読可能なものを総目録およびデータベースから選定し、その中の景観要素を抽出した。

(3) その他の近代都市図に関しては、研究分担者が各担当地域の図書館・博物館等の所蔵機関において調査を行う。この際とくに、所蔵機関での地図資料へのアクセスに困難が予想される中国・韓国・台湾については、海外研究協力者の協力を仰ぎ、できる限り全貌の把握に努め、データベース化を推進する。

(4) 第二次世界大戦以後の都市景観については、各担当地域での地形図、航空写真による都市図像の収集に努めるほか、衛星画像による都市域の解析を広範に行い、現状の統合的把握に努めた。

以上のような方法により、前近代都市図⇒吉田初三郎鳥瞰図⇒地形図・航空写真⇒衛星画像の4段階の時系列資料群を総体として共有してデータベース化し、東アジア世界における近代都市景観の形成と変容にアプローチした。

4. 研究成果

(1) 上海における近代都市図の系譜

上海における近代都市図は、1814～1918年の間で計76点を閲覧・調査できた。これらを系統発生的に系譜化すると、上海における近代都市図は、「嘉慶県城図(1814)系」・「City and Environs of Shanghai (1862)系」・「上海城廂租界全図(1875)系」・「実測上海城廂租界全図(1910)系」という四つの系統に区分され、それぞれが近代都市図の歴史的な進化過程に対応していることが判明した。すなわち、この4系統の上海都市図は、それらの製作の背景が異なるゆえに、地図形態には顕著な差異があり、時間的にも継起的発生がみられた。

(2) 成都における近代都市図の展開

四川省成都の近代都市図は、1816～1988年の間で計38点が確認できた。これらは絵画的な鳥瞰図から厳密な測量図に及ぶが、このうち近代図への契機が複数存在することが判明した。木版から石版印刷への移行、厳密な測量と製図の導入、販売・利用の大衆化の3点が重要なモメントであるが、そこには必ずキーパーソンの存在が浮かび上がり、中国における外来文化の一端としての近代地図文化の受容と変容が鮮明になった。

(3) 瀋陽における近代都市図の多様性

中国・東北地区遼寧省の瀋陽に関しては、現地の档案馆、図書館等での閲覧に厳しい制限があったものの、清代から1946年までの計36点の都市図を調査できた。その東アジアにおける地政学上の位置から、瀋陽都市図は清朝、中華民国、満州国あるいは民間地図会社などによって作成されており、東北地区の主要政治都市ゆえに大縮尺の商工地図や計画地図も残存しているのが特色である。これらにより、瀋陽の都市構造の変遷を辿ることも可能となった。

(4) 台湾の植民地化と台北の近代都市図

台湾の植民都市台北における近代都市図は、1894～1940年代で計37点存在する。この系譜を植民地化との関係で分析した。植民地統治初期の統治方針が「分離政策」であった時期、日本の植民地政府は、台湾の地理的・社会的状況を調査することが必要不可欠であった。地図は、植民地統治の重要な道具として発展を遂げていくことになる。都市地図に関していえば、都市計画の策定のための地図が次々と作成された。植民地化の進展とともに都市化が想像以上の速さで進む台北では、将来をみすえた都市計画図が数多くみられた。「現状把握」ともいえる都市地図にはじまり、しだいに植民地都市としてふさわしい都市形成の方向性を示す都市計画地図への過程は、帝国日本が植民地台湾にもたらした「成果」を結実させた地図への変容とみることができる。台湾における都市地図の発展は、まさに日本の植民地化と近代化の過程が反映されたものといえる。

(5) ソウル都市図の展開

旧韓末の1882年から植民地時代の1945年に至るソウル都市図計54点についてその全体像を探った上で、特に早期に作成された民間作成の朝鮮全図に掲載されたソウル都市図に着目し、その変化に関する検討を行い、それらの地図にいかなる情報が反映されてきたかについて考察した。

その結果、1. 韓国併合以前は情報が少ないためか、旧韓末から1900年代までは朝鮮全図の割図として掲載される簡略な都市図が中心であった。しかし、1903年の京釜鉄道株式会社による「韓国京城全図」を契機として、徐々に近代的測量を経た縮尺入りのソウル都市図が作成されるようになる。この後、観光案内図など特別な用途のものを含む多種多様な都市図が作成された。

2. やや短い期間ではあるものの、古地図からの情報が日本で作製された近代都市図に利用された時期が存在する。主として楕円形の城壁など基本的な形態や、王宮・街路などの基礎的な情報が継続して利用され、それ

に新たな情報が盛り込まれていった。

3. 早い時期のソウル都市図には「大東輿地図」の「都城図」や、それを修正した「漢陽京城図」系統の朝鮮時代の古地図が姿を変えてあらわれており、朝鮮全図にも援用された「大東輿地図」は、朝鮮時代最高の古地図との評価のとおり、日本人作成の近代都市図にも影響を及ぼしていたことが把握できた。

(6) ロシア極東における近代都市図

ロシア極東の都市図として、ウラジオストク9点、ハバロフスク4点、ブラゴヴェシチェンスク6点、ハルピン4点、大連・旅順2点の計25点をモスクワ、ウラジオストクなどの図書館で確認できた。このうちハルピンのみが満州国、満鉄の作成であり、他はすべてロシア製である。ロシアがハバロフスク・ウラジオストクのように、軍事拠点・植民拠点としての素朴な計画都市を経て、都市的な美を追求した大連・ハルピンを建設したものの、日露戦争を経て、当該都市を日本に奪われることになった。都市計画期を経て、帝政末期において都市が発達すると、地図の内容に変化が生じてくる。しかし、ロシア極東は、都市としての発展期を迎えようとした矢先に、ロシア革命に突入した。ソ連期になっても地図の発行主体は行政であることに変わらず、形式は連続しつつも、地図内容を選択する様子がうかがえた。時代と体制の変化は地図表現にも窺える。

ロシア極東の植民都市建設は19世紀後半に始まったが、その当初の段階から、これらの植民都市を描いた地図の形態は、ヨーロッパの地図文化の発展形態である「近代的な」地図であり、東アジアの他地域に存在するような「伝統的な」地図は、ロシア極東には存在しなかった。これは、ロシアが進出するまでの当該地域において、先住民族の間には、地図文化が存在しなかったことによる。

(7) 近代函館の都市図と都市形成

近代に開港場となった函館は、日本の近代化を論じる際に重要な位置を占めている。1801年から20世紀末までの函館図は確認できただけでも計163点にも及んだ。近代の幕開けとともに、港町函館は、近世までの風景とは異なる都市の近代化を急速に経験した。開港場として、近代日本の表玄関としての象徴的な空間を形成していった。都市の近代化と並んで地図の近代化の最前線となった函館は、近代空間の形成とそれを表象する空間となった。

現実空間の地図化は古くから人類が行ってきた営みであるが、近代都市図からも何らかの文化様式・観念・世界観・思考様式を解読でき、新たな自然観や国土観を抽出しうる。地図情報の増加と「科学的」表現、函館山に

注目すると、近代化が進む中でのその描かれ方の変化は、自然に対する認識の変化、世界観の変化と捉えられる。人と環境の関係についての認識の変化、つまりは人工／自然という二項対立新たなシステムの受容が近代化の一つとして浮かび上がってくる。

都市図の変遷から抽出される近代的要素は、一つには三角測量に代表される新たな測量技術の導入であり、地図作成方法の革新であるだろう。その背景として、世界観・価値観の近代化がみられるが、とくに自然と人間の関係の変化、つまり人間の環境認識、空間認識の変化として読み取ることができるだろう。具体的には、函館を眼差す視線の方向の変化であったり、描写内容の変化から読み取れる。その社会的・政治的文脈は、国土を描く行為の、より近代的な要請と深くかかわっており、より厳密な土地の把握が領土の管理と直結していたことを物語っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 長谷川孝治、歴史地理学における絵図・地図によせて、歴史地理学、査読有、52巻1号、2010、1—3
- ② 渋谷鎮明、朝鮮半島における近代都市図作成の展開、歴史地理学、査読有、52巻1号、2010、87—104
- ③ 小島泰雄、中国都市図の近代的展開、歴史地理学、査読有、52巻1号、2010、105—113
- ④ 青山宏夫、地図から見た戦国時代の越後と佐渡、新潟県立博物館紀要、査読無、特集号、2009、11—26.
- ⑤ 小島泰雄、成都地図の近代的展開、地域と環境、査読無、8・9合併号、2009、55—64
- ⑥ HASEGAWA KOJI, Constructing the Empire: Cartography in prewar Japan, Proceedings of the Portsmouth Symposium on Shifting Boundaries, 査読有、Vol.1, 2008, 215-223
- ⑦ HASEGAWA KOJI, Mapping the castle towns in early modern Japan and Britain, Papers of the 22nd International Conference of the History of Cartography, 査読有、Vol.22, 2007, 148—152
- ⑧ 青山宏夫、絵図・地図にみる近世、歴博、査読無、145号、2007、28—39
- ⑨ 小島泰雄、領域化する郷—四川農村の近代—、神戸市外国語大学外国学研究所年報、査読無、44号、2007、1—23

[学会発表] (計5件)

- ① 小島泰雄、中国都市図の近代的展開、歴史地理学大会、2009年9月20日、神戸大学
- ② 渋谷鎮明、朝鮮半島における近代都市図作成の展開、歴史地理学大会、2009年9月20日、神戸大学
- ③ HASEGAWA KOJI, Urbanization and tourism projected on the panoramic maps in modern Japan, International Conference of Historical Geographers, 2008年8月26日、京都大学
- ④ 渋谷鎮明、植民地期に作成された民間都市地図にみる韓国地方都市、第4回世界韓国学大会、2008年8月2日、ソウル・シェラトンホテル
- ⑤ HASEGAWA KOJI, Mapping the castle towns in early modern Japan and Britain, The 22nd International Conference of the History of Cartography, 2007年7月11日、ベルン大学

[図書] (計1件)

- ① 渋谷鎮明、朝倉書店、『アジアの歴史地理 領域・移動』、2007年、352頁

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 孝治 (HASEGAWA KOJI)
神戸大学・人文学研究科・教授
研究者番号：60124872

(2) 研究分担者

青山 宏夫 (AOYAMA HIROO)
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：00167222

小島 泰雄 (KOJIMA YASUO)
神戸市外国語大学・外国学研究所・教授
研究者番号：80234764

米家 志乃布 (KOMEIE SHINOBU)
法政大学・文学部・教授
研究者番号：30272735

渋谷 鎮明 (SHIBUYA SHIZUAKI)
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：60252748

(2007→2008：連携研究者)

小方 登 (OGATA NOBORU)
京都大学・人間環境学研究科・准教授
研究者番号：30160749
(2007→2008：連携研究者)

葉 倩璋 (YOU SEII)
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：30242332
(2007→2008：連携研究者)

(3)連携研究者
なし。